文部科学大臣賞

# 生命保険の心強さ

富山県　黒部市立清明中学校　一学年　村上　慧斗

僕はこの作文を書くと決めて、初めて生命保険というものを知った。これまで、生命保険について聞いたこともないし考えたこともなかった。今回、生命保険について作文を書くことにしたのは単純に知りたいと思ったからで、きっとみんなが入るものなのだと思っていた。しかし、生命保険は必ず入らなければいけないものではなかった。生命保険文化センターの二〇二二年度「生活保障に関する調査」によると、男性が七割以上、女性が八割以上の割合で生命保険に加入していることがわかった。つまり、一～二割の人は加入していないのだ。また、年代別の結果では二十代の加入率は男女共に約五割だった。

生命保険について調べてみると、加入者が公平に保険料を支払うことで、もしもの時にその保険料から保険金が支払われるという仕組みだった。つまり、元気でいる限りはもしもの時は来ないのだから、わざわざ保険に入る必要はないと考えるのもわかる。実際、僕も僕の家族も元気だ。でも僕は、どちらかというと入っておいた方がいい気がした。もしもの時が来なければ、保険料として支払うお金を他のことに使う方がいい気もする。しかし、もしもが来ないと断言することはできない。いつ、だれに来るかはわからない。そう思った時、僕は自分が保険に入っているのかとても不安になった。ついさっきまで、どちらかというと入っておきたい程度だった気持ちも、今は、入っていなかったらどうしようという気持ちでいっぱいだった。

僕の家族が保険に加入しているかを母に聞いてみた。結果、家族全員が保険に加入していた。僕はほっとした。そして、母にどうして加入しているか理由を聞くと、

「もしもの時が来た時、入っておけばよかったと後悔してしまうと思ったから。」

と言われた。また、父も母も保険に助けられた経験があったと聞き、驚いた。

母は、大学生の時に手術をしていた。毎日元気だったのに、原因もわからず背中が痛くなった。その痛みがどんどん強くなって我慢できなくなり、病院に行くと良性腫瘍だと言われて、一週間の入院と手術が決まった。母はこの時『まさか自分が』と思ったそうだ。そして、家族に迷惑をかけて申し訳ないと思ったらしい。でも、母が祖母にそのことを伝えると、保険に入っているから心配ないと言われて、不安や罪悪感で重かった気持ちが少し軽くなったそうだ。

父は、僕が小学二年生の時に、旅行先で急に具合が悪くなって、そのまま

県外の病院に入院し手術をしたことがあった。僕は正直、その時大変だった記憶があまりない。でも今になって考えてみると、着替えが足りずに新しく購入したり、病院の近くでホテルを探して宿泊したり、書類のサインのために祖父と祖母が病院まで駆けつけたりと、県外でいきなり入院したことによって様々なことがあった。だからか、父も母に、

「自分のせいで迷惑をかけてごめん。」

と謝っていた。でも母は、

「だれのせいでもないよ。いつか私はもっと大きい病気になるかもしれないし。出費は大きくなるけど、保険もあるから何とかなるよ。」

と言って笑い、父もそれに安心した様子で、一緒に笑っていたのが心に残っている。

人は突然起こる不測の事態に、不安や罪悪感でいっぱいになる。でも保険に入っていることで、「何とかなる」と思える。これはとても大きな味方だ。そのために日ごろから保険料を支払う。たとえ自分には「もしも」が来なくても、だれかのもしもの時にその保険料が活きる。自分の時にはだれかが支払ってくれた保険料が助けてくれる。そう思うと無駄なものではない。僕は僕の意思で保険に入ることを選ぶ。この機会に保険について考えることができてよかった。